



日本初!〈社会組織〉〈コミュニティデザイン〉〈グローバル・リスクガバナンス〉3つの分野を学べる大学院

立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科



Social Designer

vol.
28

巻頭インタビュー

生き生きと話を聞くということ ——オーラル・ヒストリーに学ぶ

人の話をきちんと聞くことは、実際にやろうとすると意外と難しい。さらにそこからどのように意味のある記録にまとめていけばいいのか。日本におけるオーラル・ヒストリーの第一人者である御厨貴先生にお話を伺った。

【インタビュー：中村 陽一 研究科委員長・教授】



御厨 貴 (みくりや たかし) さん

1951年東京都生まれ。東京大学・東京都立大学名誉教授。放送大学客員教授。東京大学 先端科学技術研究センター 客員教授。現在、TBS「時事放談」キャスター、復興構想会議議長代理を務める。「天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議」のメンバー。主な著書に「政策の総合と権力」(1996年、東京大学出版会、サントリー学芸賞)、「オーラル・ヒストリー」(2002年、中公新書)、「権力の館を歩く」(2010年、毎日新聞社)

—— オーラル・ヒストリーとは何か

中村／一般的には御厨先生のお仕事は政治家・文化人など著名人へのロングインタビューというイメージが強いと思われそうですが、そもそもオーラル・ヒストリーとは何でしょうか。

御厨／基本的には「聞き書き」といいますか、ある方にしゃべっていただいたものを記録にするという作業が原点です。我々が1990年代にオーラル・ヒストリーを開始した時には、そこに問題意識が含まれているべきなのではないか、ということが念頭にありました。オーラル・ヒストリーはアメリカのコロンビア大学が第二次世界大戦の体験をどうやって残したらいいかとか、ハーバード大学ではベトナム戦争がどうして起きたのかということを考える際に、文献資料ではわからないので、いろいろな人——政治家とか官僚から兵士までのいろいろなレベルの人——の話を記録していったことからスタートしています。日本の場合も戦時中の内務省官僚で戦後追放された方々の話を聞く内政史研究会というものができましたし、旧軍人の話を聞く木戸日記研究会がありました。

我々は先輩方からそれを受け継いでくれないかと言われたのですが、私はやるのであれば新しい形でやりたいと思い、政策とか、政治的に決定的な役割を果たした人物に焦点を当てることから始めました。私は『オーラル・ヒストリー』のなかで「公人の、専門家による、万人のための記録づくり」と定義しています。公人というのは今言ったような人達ですが、「専門家による」と書いたのは、きちんと訓練を受けた人が記録しないといいかげんになってしまうということです。また、得られた記録を秘匿してはいけないという思いから、「万人のための」と気負って書きました。そのために最初は「科学研究費」を取って報告書にして公開しています。

オーラルの記録にはテープ起こしという作業がありますが、これを誰が行うかが問題となりました。それまではたいてい大学院生の皆さんが勉強も兼ねて行っていました。量も多いのでフリーライターのような専門家をお願いしようとしたら、最初は文科省が認めてくれず、苦勞しました。その結果、時間はかかりましたが、彼ら専門家と伴走しな

がら一緒にオーラル・ヒストリーを研究し、商業出版もできるようになって、方法論を確立することができました。私がテープ起こし者の名前も必ず出すようにしているのは、彼らの責任を明記しているのと、仲間として考えているからです。

—— オーラル・ヒストリーの学校を開催

中村／オーラル・ヒストリーに必要な訓練や技術は、具体的にどのようなものなのでしょうか。

御厨／私は以前オーラル・ヒストリーの学校を何回か開催したことがありますが、まずは技術的にICレコーダーを使いこなすことから始めました。これが意外にできないのです。それからそれを再生して記録する方法、記録したものを保存する方法、さらに保存したものをどうやって実際に使うのか、ということ専門家を呼んで、簡単な実習を行いました。実際にやってみると相手の話したまを書いている人もいるし、省略しすぎている人もいます。意味がわかるように記録することが大切だということも学んでもらいました。

次に実際にオーラル・ヒストリーを聞いてみようということで、学生に自分の好きな人を選んでもらい、依頼をする際の手紙の書き方、電話のかけ方といった礼儀作法から、聞き取りを行う場所の選定、記録のまとめ方まで学んでもらいました。この、場所をどこにするのかは大切なことで、多くの場合、お年を召された方は自宅を希望されますが、対等に聞き取りを行うためには、できれば大学や公的な会議室などで行うべきです。たとえば大学に行くということで相手の本気になることもありますし、家にいるといい面もありますが、くだけてしまう面もあります。最後は書類にまとめて報告会を行いました。公人を対象にした報告はあまりありませんでしたが、異業種の情報交換会のように多様で、わくわくするものがありました。

印象に残った報告に故郷の祖母の戦時体験を聞くというものがありませんでした。この報告をした学生は祖母との相性が悪くて、口をきいたこともあまりないというので困ったのですが、アメリカでは遠くに住んでいる人への聞き取りが多いので、電話で行うこともあることを思い出し

て、東京からだ長距離電話で費用がかかりますが、やっごらんと勧めたところ、大成功でした。顔が見えないほうが話しやすいということもあるんですね。その方は「これは将来自分が何をするか考える時に役に立ちます」と言って記録を大切にしています。その時にオーラルというものは個人に始まって個人に終わるようなものも含めなくてはいけないなと思いました。1回に2カ月くらいの期間でしたが、私はこの学校を開催したことで、逆に公人ではないオーラル・ヒストリーというものを教えられました。

その学校はもう閉じていますが、それからは「人間は誰かに直接ものを聞いてみたいということがあるものだ」ということがつねに頭の中にあります。特に現代のような情報化の時代は人に接しているようで全部電波・媒体で接しているところがあるので、生身の人間に接して聞いてみたいという欲求はむしろ強くなっているのではないかと。オーラル・ヒストリーというものは、気軽に、能動的に人にものを尋ねて、能動的な答えが返ってきて、そこから新しい何かが生まれるものなのだと思います。

—— ポイントは生き生きと話を聞くこと

中村／私のゼミ生も調査や聞き書きをする際になかなかうまくいかなくて、先生の『質問力の教科書』を参考にしてもらったりしていますが、漫然と話を聞きに行っても、まとめることができません。設計が大事だと言っているのですが・・・。

御厨／それは難しいですよ。この国の教育が小さい頃から人の話をきちんと聞くという訓練をしていないことも原因だと思います。しかしちゃんと聞けば、話が生き生きと伝わってきます。対話というものは、この生き生きということがポイントで、話しているうちに興奮してくるようではないとだめでしょう。

中村／私が学生によく言うことは、相手は話すプロではないから、順序立ててもないし、思いついたり話したいことを話す。その話の流れはあまり遮断しないで聞きなさいと。

御厨／遮断すると相手は話す気がなくなりますね。とにかくやる気を出させないといけない。私も聞き取りのたびに毎回同じ話を20分くらいされた方を思い出します。それはその方の政治的な主張なので私はいつもやり過ぎて聞いていましたが、ある時同行していた若い人が「先生はどうして毎回同じ話を聞いているんですか」と言い出したことがありました。早く本題に入れというわけです。しかしよく聞いていると、その方は元気がない時に自分を鼓舞するために同じ話をしている。だからその話が必要なんだと説得したことがあります。結局、その部分はすべて抜いて報告書にしましたが、その方は何も言いませんでした。

—— 官僚の資料だけでは生きた歴史にはならない

中村／そもそも先生がオーラル・ヒストリーを始められたきっかけはどういったことでしょうか。

御厨／私はある時期国土計画の歴史をやっていたのですが、当然のことながら開発の天皇と言われた下河辺淳さんにおつかるわけです。そこで会いに行ったわけですが、話を聞いているうちに、どうもこの人は話を作っている感じがする。というよりも、話が「下河辺通説」になっているのではないかと。そして力のある人ですから、周りの人は何も言わない。これに対抗するには他の人の話でも聞く必要があると考えて、下河辺さん自身に他の人を推薦してもらって話を聞きに行き、またその人からも紹介してもらってと芋づる式に聞き取りをしたことがあります。そうしたら下河辺さんの話とは違う話が出てきました。下河辺さんは人物が大きい方なので、それを読んで喜んでいましたね。その時に初めて人に話を聞くことの必要性がわかりました。

それからもう一つ、官僚の話を聞く必要を感じたのは、下河辺さんは基礎資料をたくさん残している人ですが、官僚の文章なので、それ



を読んでどこが勘所なのか、まったくわからないのです。それで本人の書いた序文を持って行って、「読み方を教えてください」と言ったのですが、自分がポイントだと思った箇所はすべてだめで、それ以外のところが重要でした。それが「官僚文学」というものですが、それでは分析ができませんので、私はそれからはオーラルでずいぶんと官僚文学の読み方を教わりました。官僚の資料だけを読んでいても、生きた歴史にはならないのです。そんなことがきっかけです。

—— 思考様式の構造化が課題

中村／先生がこれからのオーラル・ヒストリーについて考えていることがありましたら教えてください。

御厨／我々は一人ひとりのオーラル・ヒストリーをつくるのに必死でしたので、できた後にその内容を再度検証したりすることはあまり行ってきませんでした。後から別の人の話を聞くと、何が間違いであるということではなくても、相対化される部分があります。これからはやはりオーラルをオーラルでクロスチェックしていくことが必要になるのではないかと思います。今は活字の資料が残りにくい時代になりましたが、話したことがすべて真実であるように考えることもできないので、中身の真実性の担保が重要です。

中村／嘘をついているわけではないのだけれども、その人が自分で構築してしまっている物語というものがあつね。歴史は多様な人々の重層的な記憶によるものなので、ある歴史が本当にそうであったかということはその時代を生きている人にもわからないことですから、そこをどういうふうにも構築していくのかということですね。

御厨／たんに様々な人の話を聞いて寄せ集めても構築にはなりません。そこから何らかの共通項を取り出していくという作業が必要です。やはり最終的にぼくらが取り出さなくてはならないものは、その人の持っている思考様式が時代によるものなのか、家(ファミリー)によるものなのかということです。かつての大蔵省とか建設省の官僚の話を聞いていると、これは仮説ですが、1970年代から80年代の高度成長末期の官僚達には、ある組織の論理にからめとられた思考様式があるのではないかと。この人達はどのようなふうを考えて物事を決めていったのか、そういうことがだんだんと見えてきました。これはオーラルでないとはわからないこと。思考様式の構造化ということですが、それはこれからやらなくてはならないことだと思います。サンプル数はもっと集める必要はありますが、それができたら面白いです。

中村／企業にもありますね。

御厨／企業は物を作ったり売ったりするプロセスがありますので、企業のオーナーとか、長期間君臨したような人の話には思考に特性があります。企業オーラルのほうが政治よりもそういう傾向があるかもしれません。

中村／成功している人ほど成功体験が様式化しているということはあると思います。本日はどうもありがとうございます。



日本では、現在一部の自治体において同性パートナーシップ制度があります。中国では、まだ同性婚姻が認められていない状況です。伝統的な婚姻と家庭を重視する観念の状況で、多くの男性同性愛者が異性との結婚を選択することになります。これにより「同妻」という言葉が生まれました。

これまでは、社会は同性婚姻に注目してきましたが、その陰に存在している「同妻」の現状、男性同性愛者と「同妻」の関係について考えたいと思います。

すべての物には二面性があると思います。社会の中で被害者としての立場にいる同性愛者は、結婚相手を騙して異性と結婚する場合、一部の人は加害者になってしまうのでしょうか。そして、婚姻関

係において被害者の立場にいる「同妻」は、同性愛者を傷つける加害者になってしまうのでしょうか。男性同性愛者と「同妻」の関係をどうすれば調和させられるのかを考えたいです。

この研究科では、各種の授業を受けることができます。各分野の知識を学び、留学生としての自分は日本人学生、社会人学生と一緒に討論でき、従来の物事に対する単純な見方も変わるだろうと思います、この研究科に入りたいと思いました。研究科に入ってから、様々な視野から立体的に物事を見ることができるようになりました。固定的なイメージを壊して見ていると、見えていなかった物も全部見えるようになります。非常に新鮮な体験だと思います。



席璟遐 さん
(せき けいか)

博士課程前期1年在学。2014年10月に来日、中国江西省出身。大学では視覚伝達デザインを専攻。中国における「同妻」(男性同性愛者と結婚する女性)の課題を中心に考えています。萩原ゼミ所属。

社会人×大学院生

10年前よりライフワークであるリスクマネジメントを本格的に学びたいという思いを持ち続け、保険会社退社を機に45歳でようやくその夢を叶えることができました。現在は「中小企業によりリスクマネジメントを普及させるにはどうしたらよいのか」という長年抱き続けていた疑問に向き合いながら、勤務終了後に大学院で学ぶ日々を過ごしています。

当研究科はMBAですが、他のMBAとは明らかに一線を画します。一般のビジネススクールでは、合理的な手法や論理から答えを導き出すことを試みますが、当研究科は非合理性を重視し、対話を重ねながら真理を究明します。実際、私たちの仕事でも、合理的に解決できる事の方が少ないので

はないでしょうか。また、合理性を追求するあまりに新たな摩擦や問題を生む事も多いと思います。上司、同僚、部下、顧客、取引先等、私たちが常に向き合う「ヒト」は非合理性そのものだとも言え、私たちが抱える様々な問題の究明には、「対話」こそ有効な手段だと、近年特に実感しています。

自分自身、この半年間の学びで多くの変化を感じています。社会人の皆様にも、当研究科の多様な学識・職業経験を有する知の巨人たちや仲間と語り合うことで、新たな気づきや視野の広がりを経験してもらいたいと思います。



大森 英直 さん
(おおもり ひでなお)

1972年生まれ。広島県呉市出身。外資系損害保険会社を経て、現在保険コンサルティング会社取締役。業務では予防や危機対応といった広義のリスクマネジメントを中心とした保険のあり方と普及を模索中。指田ゼミ所属。

21世紀社会デザイン研究科の存在を知ったのは大学2年生の時、NPOへのインターンシップ奨励プログラム「SSCS」に参加し、当研究科の中村陽一教授と出会ったことがきっかけです。その時は、仕事をしながら大学院に通っている人がいるということは、私の想像の範疇を超えており、憧れる反面、自分事として考えておりませんでした。しかし、その頃から社会・地域デザインに興味をもっていったことは事実で、少しでも地域の人と関わりたいと考えコンビニエンスストア本部に入社しました。

入社し業務に忙殺される日々が続くと同時に、仕事にもやりがいを感じながら過ごす中で、色々なバックグラウンドの人と出会い、なぜこんなに無知

なのだろうと実感したこと、またコンビニエンスストアが社会・地域の中でより多くの社会的役割を担えるのではないかと考え始めるようになったこと、知識を得て体現したい、それが当研究科入学の経緯です。

正直、入学前は入学を報告する度に「仕事で忙しいのに学業と両立できるの?」と心配され自信がなかったです。しかし入学してみると忙しい以上の素敵な出会い、新しい知識を得ることができ毎日が充実しています。今後もマイペースに最大限学び修論を書き上げることを目標にキャンパスライフを過ごしたいと思っています。



箭内 茜 さん
(やない あかね)

東京都生まれ福岡県育ち。大学卒業後はコンビニエンスストア本部に入社。店勤務、店長を経て現在は7店舗担当をし、売上利益向上、店舗経営のサポートをする仕事をしています。趣味はジョギング。中村ゼミ所属。



熊倉 百音子 さん
(くまくら もとこ)

人財開発会社代表。質の高いコミュニケーションを通して人的資源・組織資源の価値を上げることがミッション。著作に『患者さんの心をつかむデンタルコミュニケーションソッド』（医歯薬出版）。中村ゼミ所属。

17
期

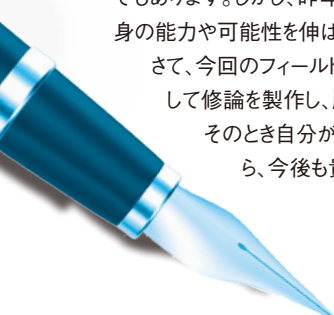
四国フィールドワークの旅から

この「キャンパスの声」の文章を四国の金毘羅山で書いています。そう、♪こんびら ふねふね～の金刀比羅宮です。秋休みを利用して修士論文の研究のためのフィールドワークとして、四国にある病院を訪ねました。病院といえはかつては「病気の人々が治療のために集う場」であり、できればお世話になりたくないところだったはず。しかしここでは病院とは「対話をする場」であり、「自分の強みを発揮する場」であり、「アートを楽しみ、体験する場」にもなっています。これまでの常識や概念では測りきれないことが様々なところで起きていたのを感じた旅でした。

これまでわたしは人財開発という仕事に携わってきました。人の能力や可能性というものも測りきれないところがあって、それがこの仕事の面白さでもあります。しかし、昨年病気をしたことがきっかけとなり、今度は自分自身の能力や可能性を伸ばしたり、再編してみたくなりました。

さて、今回のフィールドワークの旅も終わり、もうすぐ東京に戻ります。そして修論を製作し、順調にいけば2019年春には卒業の予定です。

そのとき自分がどう変わり、どうなっているのかを楽しみにしながら、今後も貴重な学びの時を過ごしたいと思っています。



堀内 真一 さん
(ほりうち しんいち)

1952年、東京生まれ。通信社記者として主に社会部に所属し、雲仙普賢岳噴火災害などの取材に携わる。松山、マニラ、熊本の各支局にも勤務。論文の取材で訪れた熊本で、久しぶりに海の幸、山の幸を堪能した。1歳になった孫と遊ぶのが何よりの楽しみ。長坂ゼミ所属。

16
期

大人げない大人のままで

定年を過ぎて役職を外れ、仕事に充実感を感じられなくなってきたころ、定年後の生き方について書かれた多くの本を読んだ。その中に「大人げない大人になれ!」(成毛真 2009)という本があった。

そこには「興味があれば何でもやってみる」「我慢なんてなくていい」「おじさんの言うことは9割が間違い」「大人を怒らせよう」など刺激的な言葉が並んでおり、「大人の言うことは信じるな!」という若者の叫びに胸躍らせた青春時代がよみがえってきた。

会社を辞め、「さて、何をしようか」と考えていた時、当研究科夏期講座の紹介が目に入り、受講すると面白かったので、即座に入学を決めた。

いま「第2の青春」を満喫している。この年になると、成績も学位も関係はない。「知るは楽しみなり」とばかりに、知らないことを学べる喜びに浸っている。先生方は研究室に閉じこもった「学者」ではなく、様々な経歴や背景を持った生身の人間。院生の年齢、職業、問題関心もまちまちだ。

当研究科は創設15年を迎えた。20年を過ぎても初々しさを忘れず、いつまでも「大人げない大学院」であって欲しいと願う。それは私自身の生き方でもある。Stay hungry, stay foolish!



新保 友恵 さん
(しんぼ ともえ)

1978年鹿児島市出身。出版社・シェアサイト運営会社にて営業・人材開発・研修講師等を担当後、現在は大学・短大・専門学校等でキャリアカウンセラーやキャリアデザイン・社会人基礎力養成講座の非常勤講師として勤務。趣味は娘(4歳)と遊ぶこと。萩原ゼミ所属。

17
期

社会を良くしたいという想いの集まる場

学生に対するキャリア支援の仕事をしていく中で生まれた問題意識について研究してみたいと考え、大学院進学を志望するようになりました。キャリアコンサルタントの先輩からの誘いで立教大学とベネッセ共催「mamotomo/パパトモカレッジ」に参加し、萩原なつ子教授がご自身も子育てしながら学ばれてきたこととその想いについて、少し涙ぐんでお話しする様子を素敵だなと感じたこと、他の先生によるレクチャーも興味深かったことが21世紀社会デザイン研究科を志望したきっかけです。

本研究科は教授陣も一緒に学ぶ仲間も多様で魅力的です。授業でのディスカッションでは、学部を出たばかりの20代、企業の第一線で働く同年代、会社定年や子育て後に入学された先輩方、留学生等、それぞれ立場の異なる意見を聴くことができます。そして根底には「社会を良くしたい」という想いを持っている人が集まっているからか居心地のよい場所でもあると思います。おかげで、現在の私は、家族の協力のもと、仕事後に週6、7日も大学院に通っています。

私の研究テーマは、保育専攻学生のキャリアデザインと保育所の職場環境・組織作りの予定です。研究が進まず一人では諦めてしまいたくなる時、萩原教授の指導を受けると、やる気が戻ってきます。私も、こんな風に相手のモチベーションを上げられるようになりたいと思っています。



黒須 大樹 さん
(くろす だいき)

大学卒業後、出版次、NPO法人勤務を経て、現在は全国の主に町村部を管轄する経済団体に勤務。地方の小規模事業者との接点を持つ中で、経済活動だけでは計れない今後の地域のあり方について興味を持ち、進学を決意。亀井ゼミ所属。

17
期

地方を巡るということ

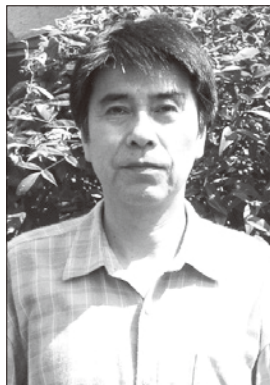
東京から五時間。新幹線から在来線に乗り換え、二時間に一本しかない路線バスに揺られやっとどり着いた。そこで出会ったTさんは創業から50年、大型のダム建設により町が栄えた頃から蕎麦屋を営んでいる。地元でとれたフキやゼンマイを使った山菜蕎麦は絶品である。

近年、高齢化が進み、買い物の不便さや医療機関へのアクセスの悪さなどから地域を離れる住民が多くなった。Tさんの店舗でも、常連客が一人また一人と姿を消しているという。この味があれば他の地域でも十分やっていたいけるのではないかと。しかしTさんは「この町が好きだから、ずっとここで暮らしたい」と笑った。

「消滅可能性都市」という言葉が世に知れ渡ったのは今から3年前のことである。これまでも過疎化や限界集落といった言葉で地方の現状が伝えられてきたが、「消滅」という言葉は多くの市民に衝撃を与えた。この町でもこうした情報はすぐに各所で取り上げられ、地域活性化の名のもと、様々な取り組みが進められているが、掲げられたそれぞれの目標値に現状を比すと厳しい現実が見えてくるのである。

本当にこの町は消滅してしまうのだろうか。答えはまだ見つからない。しかし、見守るだけではなく、自分も当事者としてこの課題に取り組んでいきたい。これからもTさんの蕎麦を思う存分味わいたいから。

多様な人たちと共に学び、 視野が広がった5年間



吉田 敏浩 教授 (よしだ としひろ)

ジャーナリスト。アジアプレス・インターナショナルのメンバー。明治大学文学部卒業。早稲田大学ジャーナリズム教育研究所客員研究員。ビルマ北部のカチン人など少数民族の自治権を求める戦いと生活と文化を長期取材した記録、『森の回廊』（NHK出版）で、1996年に大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。近年は現代日本社会の生と死の有り様、戦争のできる国に変わる恐れのある日本の現状を取材。

2012年9月に着任して、気がついてみると、あっというまに5年間の過ぎ、おかげさまで今年9月に無事、任期を終えました。21世紀社会デザイン研究科の大学院生の皆様と教職員の皆様にはたいへんお世話になりました、まことにありがとうございました。

担当した講義では、ジャーナリズムの役割とマスメディアの問題、アジア・太平洋戦争期の新聞の戦争協力、情報公開と知る権利、聞き書きとコミュニケーション、留学生向けの日本の政治・行政入門といったテーマを取り上げました。

それぞれ少人数の演習形式でしたので、資料の輪読、受講生のレジュメ発表、ディスカッションなど、大教室での講義ではできない、顔の見える参加型の授業内容になって、私自身も様々な発見があり、問題意識を触発されることが多く、とてもやりがいがありました。

ゼミも、各ゼミ生の修士論文のテーマにそって、問題意識、研究の方向性、研究の方法、関連する事実の調査、論拠にもとづく考察などをめぐって、どこまでできたかわかりませんが対話を重ね、可能なかぎりアドバイスをし、論文の完成に向けて伴走することを試みました。

各ゼミ生が取り組んだ論文のテーマも、例えば、中国で誘拐された子どもたちの救助に SNS が果たす役割、中国の高学歴ワーキングプア問題、中国の畜産動物福祉、日本と韓国の歴史認識問題、日中企業の環境経営、外国人向け日本語ボランティア活動、日本スポーツ界の暴力問題対策、福島原発被災地の仮設住宅の孤独死防止活動、インターネットと融合するコミュニティメディアなど多岐にわたりました。そのため論文指導の過程で、私自身これまで知らなかったこと、関心が向いていなかったことについて、学ぶことができ、ものの見方、考え方の幅が広がったように思います。

この研究科には、幅広い年齢層の、様々な職業・専門分野の社会人、大学卒業直後の学生、留学生といった多様な人たちが共に、フラットな関係性の場で学ぶという大きな特徴、長所があります。私もそのような学びの場を共有することで、視野が広がり、以前より多角的な問題意識を持てるようになったと思います。

市民一人ひとりが主体性をもって、多様な主体どうしの対話を重ねながら、問題意識を磨き、様々な社会の課題と取り組むことを目指す、社会デザイン研究の開かれた場として、本研究科がさらなる深化を遂げてゆくことを、心より願っています。



2017年7月8日(土)開催

おひとりさまのおカネと老後 ～おひとりさまを支えるプロここにいます～

主催 立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科、社会デザイン研究所、「おひとりさまと女性のためのおカネ」シンポジウム実行委員会

共催 認定NPO法人ウイメンズアクションネットワーク・WAN

講師 諸星 裕美氏(オフィスモロホシ事務所代表) / 金子 祐子氏(1級ファイナンシャル・プランニング技能士) / 永易 至文氏(特定非営利活動法人パープル・ハンズ設立、事務局長。ファイナンシャル・プランナー、行政書士) / 角田 朋子氏(角田朋子公認会計士事務所代表) / 上野 千鶴子氏(東京大学名誉教授、認定NPO法人ウイメンズアクションネットワーク(WAN)理事長) / 萩原 なつ子(21世紀社会デザイン研究科教授)

2017年7月8日(土)に、21世紀社会デザイン研究科と認定NPO法人ウイメンズアクションネットワーク・WANとの共催で「おひとりさまのお金と老後」をテーマに公開講演会を開催した。

生涯未婚率が2015年に過去最高を記録し、社会全体の未婚化、晩婚化が進むなかで、おひとりさまにとって、老後のお金の問題は深刻になりつつある。結婚資金よりも、老後資金といわれるように将来の生活不安を抱える現代において、誰もが老後不安のない、のびやかに生きられる成熟社会を実現するにはどうしたらよいかについて、会計士、ファイナンシャルプランナーなどのプロの具体的な知見を踏まえながら考えた。時宜を得たテーマだったためか参加者は300人を超えた。参加者の満足度も大変高く、第2弾を求める声を多くいただいた。



2017年8月6日(日)開催

成年後見制度の社会デザイン ～埼玉県飯能市の市民後見と地域連携ネットワークから考える～

主催 立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科、社会デザイン研究所

共催 成年後見制度意思決定支援研究会

ファシリテーター 長坂 俊成(21世紀社会デザイン研究科教授・本学社会学部教授)

埼玉県飯能市は、社会福祉協議会(以下、社協)が法人後見を受任して職員が財産管理を行い研修を受けた市民後見人(後見支援員・社協のパート職員)が身上監護を担当するという市民後見を導入した。高橋 弘氏(同市市民後見制度検討委員会委員長・司法書士)の基調講演では、市民後見に関する条例を制定し、市民後見人の役割や報酬等を定め、本人意思の尊重と権利擁護を実現するために、行政―裁判所―地元関係者の地域連携ネットワークが形成されていることが報告された。

総合討論では、高橋氏に加え新井 洋一郎氏(同市政策推進統括監)、本村 洋氏(同市社協主幹)、浅見 節雄氏(同市市民後見人・後見支援員)、水島 俊彦氏(弁護士・社会デザイン研究所研究員、以下、社デ研)、櫻井 幸男氏(本研究科修士生・社デ研研究員)をパネリストとして、認知症高齢者や知的障がい者、精神障がい者の事例を巡り、市民後見人による意思決定支援と権利擁護、地域連携ネットワークの在り方、市と社協との役割分担、困難

事例の取扱い、入所施設・病院と市民後見人との役割分担、社協職員と市民後見人との分担と連携、社会資源を含めた関係者との環境調整、本人意思の尊重と施設管理者の安全配慮とのバランスなど、幅広い意見が交わされた。

総合討論に先立って本研究科の授業「ドキュメンタリーと社会デザイン」と社デ研・成年後見意思決定支援研究会が共同制作したドキュメンタリーが上映された。知的障がい者(女性・施設入所)と認知症高齢者(男性・施設入所)の身上監護のドキュメントであり、本人意思を丁寧に確認する市民後見人ならではの姿勢や、認知症高齢者から表出された意思(飲酒の要望等)に戸惑う市民後見人のシーンは、市民後見人による意思決定支援のあり方について議論を深めることができた。また、地域連携ネットワークには、多職種の専門家連携による課題解決力に加え、被後見人のwell-being(幸福な状態)を高めるための社会資源のネットワーク力が不可欠となることが改めて認識された。

2017年10月14日(土)開催

シリア紛争にみる人道支援の限界と挑戦

主催 立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科、社会デザイン研究所

共催 特定非営利活動法人難民を助ける会(AAR Japan)

講師 Fadi Al-Dairi氏(Hand in Hand for Syria 共同設立者)／高城 大吾氏(元難民を助ける会シリア支援担当)／青山 弘之氏(東京外国語大学教授)

ファシリテーター 長 有紀枝(21世紀社会デザイン研究科教授・本学社会学部教授)

紛争終結の兆しの見えないシリアにおける人道支援活動とその課題について内外のNGOおよび研究者によるシンポジウムを開催。会場には270名を超える本学および他大学学生、国際協力関係者、メディア関係者ほか多くの方々が訪れ、関心の高さがうかがえた。

医療や食糧等の支援を行うHand in Hand for Syriaのフディ・アル・ダイリ氏は、紛争下、情勢やニーズの変化に応じた活動の変遷や困難、人々の厳しい暮らしを、豊富な写真と共に報告。共催者であるAARの高城大吾氏からは、食糧配付や地雷対策の報告と共に、安全管理の難しさが緊張感をもって語られた。東京外国語大学の青山弘之教授は、シリア内戦の実像が伝わりにくい要因を豊富な資料とともに解説。参加者からは、現場の声を直接聞く貴重な機会であった、シリア危機に対する自身の認識を新たにできた等の感想が寄せられた。



2017年10月27日(金)開催

農民芸術概論解題 ～農と暮らしから生まれるアート～

主催 立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科、社会デザイン研究所

協力 社会福祉法人悠和会、特定非営利活動法人自然生クラブ

総合司会 長坂 俊成(21世紀社会デザイン研究科教授・本学社会学部教授)

社会福祉法人悠和会(岩手県花巻市。認知症高齢者グループホーム等を運営。以下、銀河の里と呼ぶ)と特定非営利活動法人自然生クラブ(茨城県つくば市。以下、自然生クラブと呼ぶ)の協力を得て、農と暮らしから生まれるナラティブの報告と討論、アートの上演がなされた。銀河の里は、認知症高齢者や知的障がい者とともに稲作やリンゴ栽培、シードルづくりなどに取り組んでいる。銀河の里の事例報告として、宮澤京子施設長による「認知症軍団ツアーin恐山」ほか、今野美稀子氏、佐藤万里栄氏からの3つのナラティブが報告され、認知症高齢者の発言を症状として切り捨てることなく、その中の世界観や死生観、祈りや神話を読み解きながら目に見えない思いを受け継ごうとする姿がうかがえた。また太田直史氏(同職員)による舞踏は、現実世界と異界をつなぐ中間領域としての銀河の里を表現したものと感じられた。

柳瀬敬氏(自然生クラブ・施設長)から、大地の祈りから生まれた田楽舞が紹介された。知的障がい者と共に有機農業や炭焼き

などの農の生活を営みつつ、太鼓やダンス、絵画等の表現活動に取り組んでいる。演奏からは、太鼓と笛や鐘の音が響き渡り、見えない何かと対話し祈りをささげている儀式としての空気が会場を支配した。

パネルディスカッションでは、宮澤健氏(社会福祉法人悠和会理事長)を司会として、宮澤京子氏、柳瀬氏、吉田耕治氏(塩釜カウンセリングルーム主宰)、永田久美子氏(認知症介護研究・研修東京センター研究部長)により、神話的世界を安心して語れる場の意義、見えない世界をナラティブやアートして表現することの豊かさについて意見が交わされた。

最後に、酒井隆太郎氏(銀河の里職員)をリーダーとする「銀心會」のパンクロックが演奏され、自然生クラブのメンバーほか来場者がごちゃまぜに踊りだした。農と福祉の暮らしの中から生まれた表現とそこに込められた祈りや神話こそ、真の共生社会をデザインするカギとなるものと実感した。



社会デザイン研究所のご紹介

中村 陽一 社会デザイン研究所長

社会デザイン研究所は、21世紀社会デザイン研究科附属の研究科として2008年に設置されました。研究科で行われている教育・研究をふまえながら、社会デザインというキーコンセプトをさらに実践的に活かし、実現させることをめざして、その活動を広げており、研究科が掲げている人材像としてのソーシャルデザイナーの輩出と、そうした人材が社会のイノベーションのために活躍出来る場として各種のプロジェクトや研究会を展開しています。

研究所のミッションは以下の通りです。

1. 課題解決としての社会デザインを追究する

理論的・構造的な追究はもとより、現場と往復し、当事者性と内発性をそなえた実践的な研究を重視します。

2. そのための実践的なプロジェクト研究を推進する

これまで21世紀社会デザイン研究科が蓄積してきた国内外の多様なネットワークを活かした実践的なプロジェクト研究を推進します。

3. 社会デザインの推進人材としてのソーシャルデザイナーを輩出する

研究科や関連する学会はもとより、学内外のさまざまな場と結びながら、ソーシャルデザイナーが育つ場づくりを進めます。



中村 陽一 (なかむら よういち)

立教大学社会デザイン研究所所長。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科・法学部教授。社会デザイン学会副会長、日本NPO学会発起人・前理事。多数のNPO、ソーシャルビジネスなどの運営やサポートなど、現場と往復しつつ実践的研究、基盤整備、政策提言に取り組む。研究指導分野はNPO/NGO、市民参加、ネットワーク組織、ソーシャルビジネス、CSR、コミュニティマネジメントなど。

これにもとづき、2017年度は、青森県青森市(地域活性化協議会および商工会議所)、茨城県境町などとの連携協定締結と活動の具体化、社会デザインに関する各種研究会活動やプロジェクトの推進(それぞれにおける研究員の委嘱)、公開講演会等の開催などに取り組んできました。

引き続き、当研究所が実践する事業が社会デザインの実現や社会のイノベーションに繋がるよう、所員・研究員を始め、関係者の創造的な取り組みを進めていきたいと思えます。皆さんからもぜひ積極的な提案をお待ちしています。

問合せ先

立教大学社会デザイン研究所

Tel & Fax 03-3985-4725

HP <http://www2.rikkyo.ac.jp/web/social-design/>

2018年度 オープン大学院『社会デザインがやってきた!』

<p>2018年 第1回 4月28日(土) 第2回 6月23日(土) 第3回 9月22日(土) 第4回 10月27日(土) 13:30~16:30(予定)</p>	<p>◆オープン大学院『社会デザインがやってきた!』 対象/本研究科に関心をお持ちの方 目的/研究科の雰囲気を実感していただけます 内容/所属教員の講義や修了生による論文報告を一般に開放します。 申込/不要(無料) 会場/立教大学池袋キャンパス 太刀川記念館3階 多目的ホール 問合せ先/21世紀社会デザイン研究科委員長室 TEL.03-3985-2181 (月~木)11:00~18:00</p>
---	---



発行/
立教大学大学院
21世紀社会デザイン研究科
編集長/中村 陽一
編集支援/木戸 さやか
発行日/2018年1月9日
〒171-8501
東京都豊島区西池袋3-34-1

More Information

21世紀社会デザイン研究科では、講演会やイベントの情報をホームページでお知らせしております。

21世紀社会デザイン研究科
ホームページ

<http://www.rikkyo.ac.jp/sindaigakuin/sd/index.html>



21世紀社会デザイン研究科
Facebook

<https://www.facebook.com/21csd/>



デザイン(研)ベンチンロケル